文化生活部
bunka@kumanichi.co.jp
TEL:096-361-3181 FAX:096-361-3290

文化 | Culture |

月、水、金、土曜日 掲載

2021 分断を越えて [1]

コロナ禍の下、国内外で起きている「さまざまな「対立」や「分断」は広がり、深まりを見せている。このまま日本の社会はさらなる分断に向かうのか、分断の先に希望を見いだせるのか。新たにスタートする大型インタビュー企画「分断を越えて」では、さまざまな識者に聞いていく。

長崎大熱帯医学研究所教授
山本 太郎さん

新型コロナウイルスの県内感染者が初めて確認されて1年。人類と感染症の歴史に詳しい長崎大熱帯医学研究所の山本太郎教授(56)は、ウイルスを「敵」とみなす考え方が人間社会に分断をもたらすと言う。「ウイルスとの共生」という視点で収束の道筋を描き、コロナ後の新しい人間関係や社会の在り方についても考察を深めている。

(聞き手・川崎浩平)

新型コロナの流行が始まってから、それを「戦争」や「戦い」に例える論調が相次ぎましたが、違和感を覚えました。戦争と言ってしまったがために、「(戦時中のように)欲しがりません勝つまでは」という空気ができて、自粛警察が生まれてしまった。自粛警察は自分たちの「正義」に外れた人を悪とみなし、社会を息苦しくする、差別や偏見、分断につながります。

また、感染症とその対策には分断を生んでしまいやすい素地があることにも、注意が必要です。

(国の誤った強制隔離政策で)人権をないがしろにしたハンセン病の教訓などを、私たちは学んできたはずです。コロナでも私権の制限は非常時の例外的措置に限り、その後の日常にも続いてしまうことがあってはいません。

小さな物語

当初から、コロナ収束には3年ほどかかるとみています。ワクチンの開発は予想以上の速さで進みましたが、フルマラソンに例えると日本はまだ折り返し前、10~15キロ地点くらいにいる印象です。

冬に向け感染者が増えるのは予想されたことだったのに、医療が逼迫している今の状況は反省すべき点でしょう。病床数を含む医療の供給体制を増やすことと、患者を減らすことを両立させなければいけません。(濃厚接触者を追跡する)クラスター対策からの転換も、そろそろ必要だと考えます。

重要なのは医療崩壊を何としても避けることです。2010年に起きたハイチの大地震では、医療を含む首都の機能が失われ、医療支援に入った私たちは被災者の「命の選別」を迫られました。それを仕方ないと正当化し、次第に慣れてしまうことは、社会で最も弱い人を守るという基本的な倫理観をまひさせます。怖いことです。

いま私たちの前に倒すべき敵はいません。守るべき相手がいるだけです。それは感染した人であり、コロナの影響で経済的、社会的に困窮した人です。

収束に向け、社会全体で集団免疫の獲得を目指すという大きな物語の中に、「家族にうつして死なせてしまった」「営業自粛で自殺者が出た」といった小さいけれども無視できない物語が存在します。ワクチン以収束への大きな希望ですが、たとえ100万分の1の副反応でも、起きた人にとっては1分の1の物語です。

家族を失うなどした人たちにどんな言葉を掛けるべきか、考えたところで正解などありません。だけど話を聞くことはできます。社会として小さな物語にも寄り添いながら、葛藤を乗り越えて進むしかありません。

ウイルスは病原体として研究が始まった歴史があり、すべて悪いものと思われがちですが、実は違います。世界に存在するウイルスのうち、人間など宿主に病気を引き起こすのは0.001%とか、それ以下です。

大半のウイルスは何もしないか、むしろ生物や地球環境に良いことをしている可能性が近年の研究で分かってきました。例えば哺乳類の胎盤がそうです。母親の免疫細胞にとって、父親に半分由来する胎児は異物のはずですが、胎盤によって拒絶反応から守られています。胎盤を形成にウイルスが働いていると考えられています。

「転校生」と共生

ウイルス目線で考えると、別の風景も見えてきます。ウイルスは生存するのに宿主を必要とします。宿主を殺すことは自らに不利となるため、究極的には敵対を目指すのではなく、むしろ仲良くしようとするはず。私が新型コロナを「転校生」に例える理由の一つがここにあります。

無理に押さえ込もうと攻撃すれば、相手も生き延びようと進化する。進化したウイルスに対し、人間もまた対抗手段の開発に迫られる。軍拡競争のように際限がありません。

だから相手をよく知って、緩やかに付き合う共生や共存の視点が必要です。10年後にはコロナがありふれた風邪のような感染症に落ち着くイメージを持っています。

新たな「近接性」

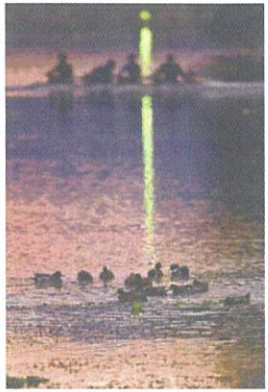
アフターコロナの時代は情報技術(IT)中心の社会となるでしょう。1年前にはテレワークやオンライン授業などが考えられませんでしたが、普及し始めています。そうやって社会的距離を保ちながら、人間関係の新たな「近接性」というものを模索していくことも必要だと思います。

同時にコロナからの復興は、脱炭素や生物多様性の保全といった目標と両立させなければなりません。新型ウイルス感染症が度を越して頻発するようになったのは、熱帯雨林の開発や温暖化が相まって野生動物の生息域が縮小し、人間との距離が縮まったのが理由です。動物と共存していたウイルスが、ヒト社会に入り込んでくるのです。

グローバル化や都市の人口過密も含め、社会の在り方がパンデミックを引き起こしたともいえます。

感染症の歴史をひもとくと、パンデミックは時に社会変革の先駆けとなってきました。大きな困難の中にしか変革の芽がないとすれば、今がそのチャンスかもしれません。コロナ前の生活や社会の在り方を二気に変えるくらいの意識が求められます。ただ前に戻ったのでは、コロナを乗り越える意味がないと思うのです。

コロナ禍 社会変革の意識を


下江津湖で羽を休める力モ。奥はボートの練習をする学生＝熊本市東区 (小野宏明)

◇やまもと・たろう　1964年広島県生まれ。熊本大医学部に所属し、熊本大医学部と江津湖で対抗戦を繰り広げた思い出がある。専門は国際保健学、熱帯感染症学。京都大大学院医学研究科助教授、外務省国際協力局勤務などを経て、2007年から現職。著書に「感染症と文明」(岩波新書)、「疫病と人類」(朝日新書)など。長崎大医学部卒。学生時代はボート部に所属し、